

武蔵野

立川 武蔵野 本社 江東

武蔵野支局 〒180-0006
武蔵野市中町 1 の 13 の 1 3F
電話 0422(51)3131
FAX 0422(51)3133
musasino@yomiuri.com
都内版編集室 電話 03(3217)1465・1466
江東支局 電話 03(3631)6116
立川支局 電話 042(523)4477
ホームページ
www.yomiuri.co.jp/local/

購読は
Y 0120-4343-81

【広告】読売Palette 03(6272)9027
【折込チラシ】 0120-03-4343
【読売旅行】 03(5550)0666

4 月 15 日(木曜日)
旧 3 月 4 日<赤口>

■ 通日 105
月 齢 3.0
(正午)
■ あすの暦
=東京標準=
満潮 6.02
干潮 0.27
(大潮)
日出 5.09
日入 18.14
月出 6.51
月入 21.07

桐 たんす
単筒の
松本
10 年保証
フリーダイヤル
0120-30-4440

教壇上の青春歌に詠む

文人の
武蔵野

武蔵野大学の前身である武蔵野女子大学の文学部日本文学科は、1965 年、武蔵野女子学院短期大学の助教授だった大河内昭爾らの尽力により産声をあげました。

大河内は、文芸評論家の亀井勝一郎を主任教授として迎えるつもりでした。ですが交渉の席で亀井から土岐善麿を強く推され、土岐は亀井の着任を条件に承諾します。結局大河内はふたりを採用し、土岐善麿に主任教授を依頼することになります。

80 歳で武蔵野の教壇に立つことになった土岐は、この地

土岐善麿 ③



武蔵野女子大学で教壇に立った土岐善麿(左)

でたくさん歌を詠みました。「このいのちのひかりこそわれらのもの 春はいま武蔵野に 学園あり」「武蔵野の樹かげに語れ われにも若き日はありしなり 若き女性らよ」からは、生きとし生けるものとともに学ぶ場に向けた柔らかな眼差しと凜とした

立ち姿が目につきます。「おもむろに立ちて静かに語らんと ふくさをひらく 教壇の前」「梁塵秘抄」マイクを片手に語るとき 独楽も蝸牛角上も歌ごえ高し、「方丈記の講義をおえて 若葉の風に たたずむわれや中世の人」「教壇に立つ楽しさを語りあい しばしながいに年を忘れつ」などの歌からは、講義とその前後の静かな昂奮が伝わってきます。

春には「ここに学ぶとはじめて立ちし校庭の 花の四月の初心忘るべからず」と詠みました。新入生を迎えること 14 回、土岐は 94 歳まで教壇に立ちました。在任中に頼まれて作詞した「武蔵野女子学院歌(第二)」の掉尾に「ここ武蔵野の名を負いて ともに楽し」と記した通りの武蔵野時代でした。

おすすめの 1 冊

「武蔵野の教壇に立った文学者」

2010 年 10 月 22～24 日、武蔵野文学館準備室が開催した第 1 回企画展示の図録です。まだ予算も場所もなく、有志の学生や卒業生と教員が大学内の教室を借りての臨時展示でしたが、土岐善麿の自筆原稿や短冊が公開されるなど、内容は豊かでした。小説家の黒井千次氏も来訪し、図録にはその時の写真も掲載されています。

(武蔵野文学館編)
土岐善麿
秋山豊
黒井千次
武蔵野の教壇に立った文学者